



「赤」と「緑」と「森の人びと」

名和 克郎

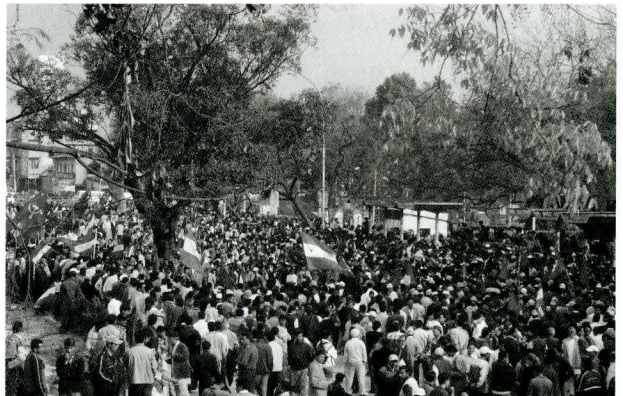
(なわ かつお)

東京大学東洋文化研究所助教授

あらたな「森の人びと」

二〇〇四年三月、二年ぶりに訪れたネパールの首都カトマンドウで、調査村出身の友人に新しいビヤンシー語の語彙を教えてもらった。「森の人びと」「ジャングルの人びと」といった意味になるその語は、しかしヒマラヤ南麓の森のなかを移動しつつ生活していた採集狩猟民を指す語彙ではなかった。一九九六年に「人民戦争」を開始したマオイスト(ネパール共産党毛派)のゲリラたちを指すことばだったのである。

ネパールとインドの西側の国境の最北部一帯で話されているビヤンシー語は、チベット・ビルマ語族に属するが、チベット語とも、ネパールで話されている他のチベット・ビルマ語族の言語とも大幅に異なり、周辺の幾つかの言語変種を除くと相互理解可能な言語は存在しない。このことから、ビヤンシー語で話してさえいけば、外来者に会話の内容が筒抜けになつてしまう気遣いはない、といえそうである。だが、事はそう簡単ではない。ビヤンシー語にはネパール語やヒンディー語からのかんりの数の借用語が存在し、とりわけ政党名を含む近代的な制度や事物に関する語彙のほとんどが、そうした借用語で占められているからだ。武器をもったゲリラたちの目の前で、ビヤンシー語を使ってゲリラや政治について語るのには、ゲリラ自身が少なくとも会話の主題を理解してしまう可能性が高いため、端的にいうと危険な行為なのである。マオイストを指す隠語が生まれる所である。



ネパールの首都カトマンドウでおこなわれた主要議会議政党によるデモ(2004年3月)



ネパール、ビヤン地方の村「ジャングルと森」(1993年)

武器をもった外部者たち

マオイストが村に来るようになる以前、類似の使われ方をしていたビヤンシー語の語彙を、わたしはふたつ知っている。「赤」と「緑」である。ともにビヤンシー語の基本的な色彩語彙なのだが、「おい、赤たちが来たぞ」「緑たちは行っちゃったよ」などと呼ばれることがあった。「緑」は兵士のこと、これが彼らが身につける制服や迷彩服に由来することはすぐにわかる。他方「赤」の語は、日本語における用法とは大いに異なり、警察を意味する。これは警察官がかぶる赤っぽいベレー帽に由来しており、実際「赤帽」といわれることもあった。

緑、赤、森の三者は、村人にとって基本的

に歓迎されざる存在である。確かに軍も警察も、少なくとも「人民戦争」がはじまる以前には、かなりの村人の目に魅力的な就職口と映っていた。だが日常生活で出会う兵士や警察官は、武器をもってやって来て、要らぬ詮索をしたり厄介事を起こしたりする存在とも見なされていた。この点で「緑」や「赤」は、「森の人びと」とさして変わらない訳だ。もちろん、マオイストが森から村にやって来るようになって、村人の実際の危険が大幅に増加したことは事実であるのだが。なお、筆者が知る限り、現在刊行されているビヤンシー語の語彙集等の情報からは、「森の人びと」という複合語を正確に再構成することはできないことを付言しておく。